

大月市猿橋町の吉川商店は、通称「活版所」と呼ばれ、幕末期から家業として書籍の販売と印刷出版を手がけてきました。大正十二年の「北都留郡誌」の発行は人のよく知るところです。しかし、そこで生まれた行雄が詩を書き、鈴木三重吉の主宰する「赤い鳥」にかかわっていたこと、そして同人誌の編集と発行を店の中で手がけていたことを知る人は少ないようです。まず、詩を読んでみましょう。

三日月 吉川行雄

枇杷(びわ)の花

お背戸(せど)。

三日月

冷い。(ひやい)

いたちつ子

ほう、ほ

うまやに

消えた。

「赤い鳥」昭3・5

これは、昭和三年五月の作で、岩波文庫の「日本童謡集」(与田準一編)に載っている作品です。緊迫した詩情が的確に伝わってきます。この童謡集にはもう一つの作品が収録されています。

うすい月夜 吉川行雄

うすいおぼろに
いぶされて
月は魚になります

ほそい木にいる

たんちようも

とろり、とぼけて飛びます

る

風にふかれて

ふわり来て

とろり、お羽が消えます。

うすい月夜の

れんぎようは

白い羽虫になります。

「赤い鳥」昭4・3

うすいおぼろの月が魚になり、丹頂鶴の羽となり、

風にふかれて羽が消え、れんぎようの花が羽虫になる

という、奇想天外な展開を

「まする」とやわらかく

まとめているのは、天性の

詩情といえましょう。

この童謡集には、北原白

秋、西條八十、サトウ・ハ

チロ、島崎藤村、竹久夢

二、新美南吉、野口雨情、

三木露風、若山牧水等、大

正七年から昭和二十年まで

の、八十七人の詩が収録さ

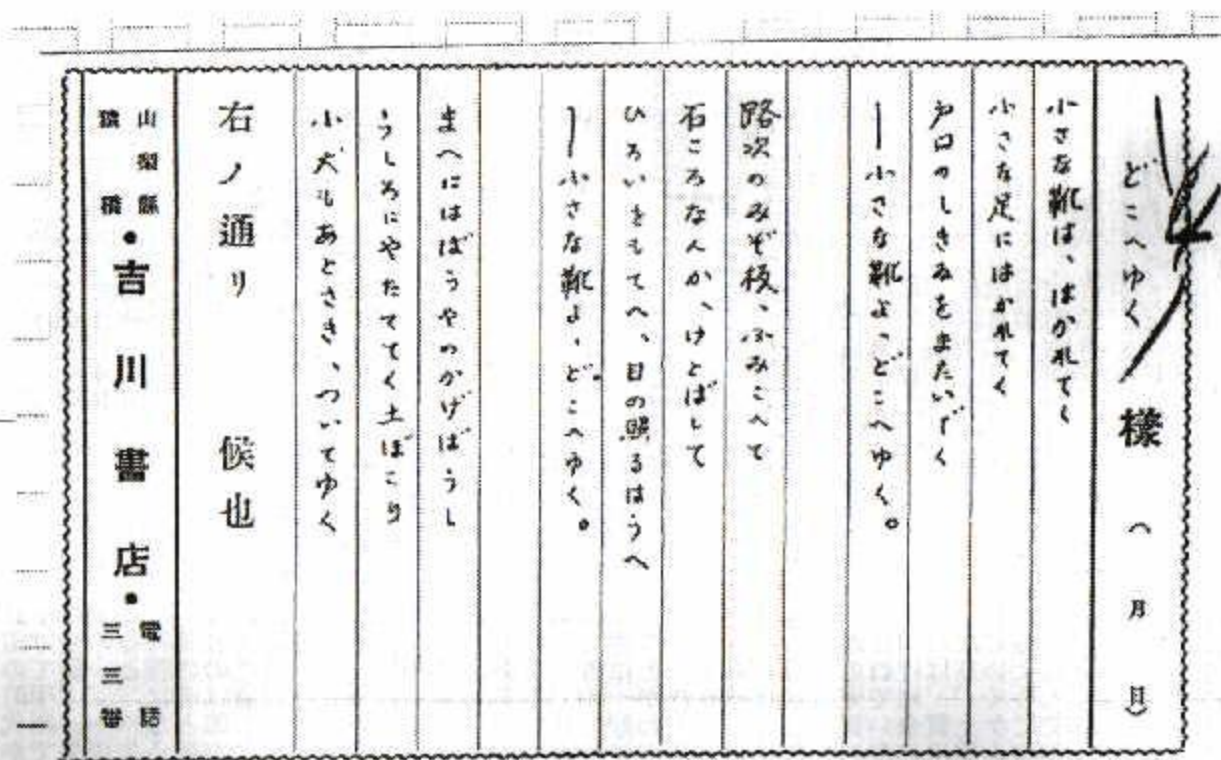
れています。そして、アイ

ウエオ順の作者別の目次に

は、八十二番目に吉川行雄

の名前があり、この二作品が載っています。その前が与謝野晶子で、後が吉田一穂です。

跡をとらず、弟に家業をまかせ、自分は店の一隅で詩を作り、同人誌の発行に専念したのでした。



「吉川書店」の名入りの仕切書に書かれた原稿です。美しい筆跡が目にしみます。

このように、吉川行雄は日本童謡史の一劃に燦然たる地位を占めているのです。行雄は、吉川商店の長男として生まれながら、その

行雄の仕事場である部屋
の窓から、四季折りおりの
月がよく見え、行雄が月と
親しんでいたことを家人か
ら聞くと、詩人仲間から

「月夜の詩人」と呼ばれて
いたことが、納得されます
が、確かに「月夜」にかか
わる作品が多いことも事実
です。

鈴の音してた
どこぞの月に
銃と櫓が鳴った
(十二・四・二七)
たんぼぼ

昭和四年九月に、吉川書
店から童謡集の単行本「月
夜の木の芽だち」を出し
ました。童謡雑誌では、昭
和三年十一月から「パン
(鵜)」を第九号まで発行
し、昭和十一年九月には周
郷博と「ロビン」を創刊、
第二号を十二年二月に出し
ました。この四か月後の昭
和十二年六月に行雄は死去
しました。ほの暗い月夜に
全てを燃焼して、詩人吉川
行雄は旅立ちました。

たんぼぼ たんぼぼ
その花は、月にほろんと
ともして
たんぼぼ たんぼぼ
その花に、日ぐれもほろ、
と あかつてる

「赤い鳥」に十八篇、「金
の星」に二篇の詩が載りま
した。

月夜
椎の木の
てうど高さに
ランタンのよな
月がでてゐる。

終りに、死期の迫ってい
た行雄が、渾身の力を振り
しぼって詩作したのであろう
三篇を残されている手書原
稿から読んでみましょう。

誰かふえ
遠田のかはづ
タンロンロン
風もでてゐる。
ランタンの
月のまぢかに
チラチラとさざなみ
雲もながれる
(十二・五・四)

雪野で
雪に埋れた
北野のはてに
鶴がいち羽
凍えてをちた
トロイカが駆けて

執筆者 井上 豊

昭和七年十月、吉川行雄は猿橋の自宅吉川書店から童謡詩集「鷲」を出版しました。その後記をみますと行雄が同人誌の発行に強い意欲をもちしていたことがわかります。

年来の友原田小太郎君の第一童謡集を「パンの作品集」第四冊として、私の手から上梓することの出来たよろこびをまず、おもう・原田君は、みづから称して鷲堂と呼び、いわゆる「童謡詩」をかいている若い詩人である。枯淡を愛し、匂いなき感覚の境地を、しずかに守って、生活の苦悩をかたわらに、夜々として倦ことを知らぬげである。

・まことに端厳、正確、好箇の自然詩であり、写生詩だ。・私は芸術を愛するのみに於て、寡欲にしていさぎよい少数の士のところからなる清鑑にまとうとするものである。

(パンの部屋にて)

吉川行雄

このように行雄は、同人誌を猿橋の自宅から刊行していました。そして、昭和十一年九月、周郷博(すこうひろし)と「ロビン」を創刊することになりました。

周郷との出会いは、「母子の詩集」(国土新書)に「わたくしが一高(旧制第一高等学校)の一年生のとき、そのころ復刊した雑誌「赤い鳥」に、吉川行雄という詩人が美しい月夜の詩を書いていた。・一年ほどたつたころ、吉川行雄は見も知らぬわたしに手紙をくれて、彼がだしていた「鷲(ぼん)」という詩の雑誌(個人雑誌)の仲間にならないかといってきた。・さそわれるままに飄然と中央線に乗って、手紙で指定のように猿橋の駅にわたしは降りた。

こうして行雄は、詩人仲間との交友が広がっていきましたがその中に富浜出身の藤井樹郎がいて互いに競いあっていたことは注目されてよいと思います。「日本童謡史」によれば、吉川行雄は「赤い鳥」童謡欄の常連でした。「本年中、特に目覚ましい働きをしてくれたのは、やはり与田、多胡、吉川(行)の諸君で・」とか「巽、多胡、吉川の諸君を初め・相変らずの力作の氾濫で・」というように、行雄は精力

的に作品を発表し、しかも異彩を放っていたことが、こうした選後評に現われています。



吉川行雄の生家(現 吉川商店)

吉川行雄は、昭和十二年五月、三十一歳で死去しましたが、ここでは数多い作品の中から、死期の迫っていた直前のものを読んでみましょう。

ころころこん

青い月夜に

ころころこん

ころころける胡桃でしよ

いえいえ月夜は

ころころこん

あれは田蛙、ころとなく

青い月夜に

こんこんころん

こんと割りましょ

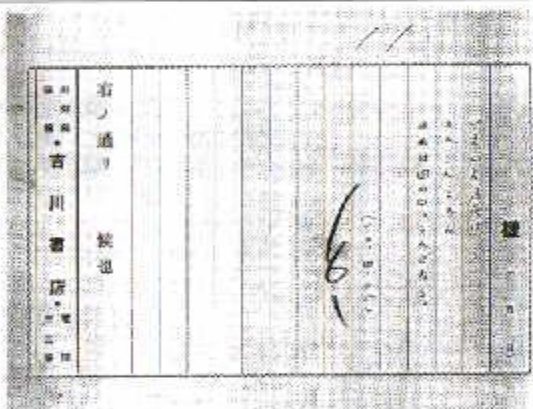
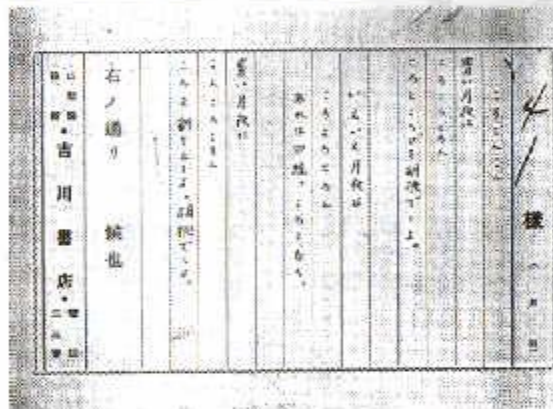
胡桃でしよ

いえいえ 月夜は

こんこんころん

あれは田の口 こんとなく

(十二・四・二八)



「青い月夜」という幻想的な静寂の中で、胡桃が「ころころこん」と響いたが、それは田蛙だった。美しい詩情がただよっています。

思うこと

丘のほとりの椎の木に
風がおはなしやめるころ

牧場の柵にくる牛も
あかねの雲だかみてるころ

まちまでつづく野の道に
お日さまよならしてるところ

かぞえて七つ鐘の音が
野づらをひくくわたるころ

誰もゆけない谷あいや
小人が住んでる森かげで

逢魔がどきの妖精は
くろい上衣をつけるだろ

(十二・四・二八)

平穩無事であった長い一日も、「逢魔がどき」(たそがれ)がくると、「妖精」は「くろい上衣」をつけなければならぬだろう。行雄はここに自らの死を予感し、象徴しているように思われます。「くろい牛」「だれもゆけない」「くろい上衣」と、自らの短い一生を一日としてとらえ、夕闇の中に死をみつめていようと思えます。

白牡丹

白牡丹

日の照るなかに

蓋は、まだ

つゆをためている

白牡丹、手の鳴るほうへ
ほら、いつも、すこしゆ

れてる

白牡丹

微風のなかに
かげは地に
ひとつおちてる

白牡丹、手の鳴るほうへ
ほら、いつも、すこし向
けている

(十二・五・五)

亡くなった月の作品です。ここには死の不安も驚りもなく、平穩な心のかすかな動きが明瞭にとらえられているように思えます。

◆お知らせ◆

六月八日(金)夜八時〜八時二十九分、NHKテレビで「詩人吉川行雄」が放映されます。さらに、吉川行雄の詩「たんぼぼ」が作曲されて子どもたちに歌われるようになるということですね。また六月九日〜十七日、猿橋町の猿橋幼稚園ギャラリーを会場に、「金子みすず展」が「月夜の詩人吉川行雄展」とあわせて開催されます。講演も予定されています。皆様のご来場をお待ちしております。

執筆 井上 豊